

新書紹介

園芸の時代

塚本洋太郎著

日本放送出版協会 B 6版 二六四頁 六〇〇円

民俗学、あるいは社会学の地域社会研究の手法に、個人史による地域社会研究、といったものがあるのだが、本書ならさしずめ、園芸史による現代社会研究とでも言えようか。園芸書と聞くと栽培技術書と思われるが、本書はそういう発想の本ではない。本書は園芸という、ともすれば「老人、子供、一部趣味者の手なぐさみ」になりがちな、狭い専門の枠に籠りがちな分野を総括的にとらえ、その将来を展望したものである。同じような分野でも、農業経済や生態学からの社会批評、研究は少なくないが、それらを媒介としつつも園芸学の立

場から書かれたものは今までなかったように思う。本書の構成は九章から成り、それぞれ園芸に関することが取り上げられ、その歴史的な考証から、資本主義経済下での園芸の発展、変貌、園芸をとおしての日本とヨーロッパの比較、文化論のようなものまで、分りやすく説かれている。各章間の脈絡はそれほどなく、章の内容は独立しているの、興味ある章から読み始めることが出来る。各章とも著者の豊富な知識と経験により、無味乾燥な園芸技術論や、その場かぎりの華やかなスタイル・ブックに見なれている眼には新鮮で、園

芸とは何か、植物を育てるとはどういうことか、を改めて考えさせてくれる。

本書の中でも特に興味深いと思われる第四章「経済発展と生産園芸の変貌」、第五章「自然と公害、花と緑の対応」を簡単に紹介する。

四章で著者は、それが花であっても、貨幣経済下で商品として生産されるものであれば当然その生産形態は資本の論理に合ったもの、単一化・大規模化の方向に進む。また航空機の発達は花を国際商品化し、隣国の花卉生産に深刻な影響を与えるほどになっている。といったことを統計や事例をあげながら説明する。なかでも米国、カナダの豊富な穀物生産のおかげで西独の花卉生産が伸びる話や、米国の花卉の値段に影響を与えるコロンビアのカーネーション栽培の話は農業の国際分業化の将来を明示しており大変おもしろい。

全体として著者の口調は柔らかく、自己の立場を主張することはあまりないが、五章では生態学者と著者の植物に対する認識のちがいを明確にしている。例えば、生態学者の自然認識の代表的な例、「自然の植物の場合植物だけでなく、それは土壌微生物、小動物、成熟した土壌をセットした生態系の一員としての植物であって、生態系は緩衝作用をもっている。それが空気や水の浄化にも役立つが、公園の植木や芝生には生態系がないのでこのような作用をもたない」や「潜在自然植生を鏡として緑化すべし」に対して、それに反対する理由は何もない、とその理論を認め、また無思慮な環境破壊に与しない立場を明らかにしつつも、その理論を語る人々が生態学を必ずしも正確に理解していないこと。

その理論が成立するための前提となるものが都市では失われていることを指摘し、都市の緑化について園芸栽培学からの見解を披露している。第一点は「同じ気候型の地域間では、その地域に原産する植物をとりかえても、その植物は移された土地でよく育つ」、つまり同一気候型産外来樹木の利用であり、第二は「自然環境要因中、自然状態では光と温度を自由に調節することは出来ないが、水分だけは調節しやすい」ことからくる植物へのかん水の必要性である。第三点目は遺伝特性「雑種強性」を利用した品種改良である。そして続けて「栽培の手を加えれば代償植生であっても、そこに生態系が成り立つ」と管理保護の必要性を説く。この見解に対して生態学から当然反論もあると考えるが、都市という狭い空間に限って見れば、植物も人間と無関係に存在していたわけではなく、おたがい影響し合いながら生存してきた、歴史的存在であることをぬきに生態系環境は語れないのではないかと思う。

植物の生存に適當とも思えないアスファルト・ジャグルの中生の呪縛から逃れられない人にとって、著者の意見は救いとなるのではないだろうか。

清水富二男